

ヨーロッパから移住してきた科学者と かれらの新しい環境

ヴォルフガング・ケーラー
高木正道・厨子光政訳

原典：Wolfgang Köhler, "The Scientists from Europe and Their New Environment", in: Franz L. Neumann, Henri Peyre, Erwin Panofsky, Wolfgang Köhler, and Paul Tillich, *The Cultural Migration: The European Scholar in America*, Introduction by W. Rex Crawford (1953, Philadelphia), pp. 112-137.

私は、ヨーロッパから移住してきた科学者全般についてお話するよう依頼されています。あいにくこれは私には荷が重すぎますので、20年前、卓越した自然科学者たちが移住した後に起こった発展について若干の所見を述べ、その次に、それとはまったく異なる移住に話題を移したいと思います。それは、心理学の分野で起こった移住で、もっとずっと前に始まっていたものです。

自然科学の分野における移住の影響は、直接的で、明らかにすべてが良い影響でした。ヨーロッパとアメリカの科学者のいずれにおいても、実験と推論の水準はきわめて高く、両者のあいだで深刻な論争が起こったことはこれまでありません。実際、新参者のなかの多くは、移住してくる前からこの国でよく知られていました。それでも、より親密な人間関係のおかげで新発見がなされる速度が間もなく速まったことを、アメリカの科学者たちは認めるでしょう。

ヨーロッパの科学者がこの地に来てまだ数年しか経っていない頃、そのうちの何人かが、非常に恐ろしい物理学の国策への応用という形で、その知力を示すことのできる状況が生じました。1939年の秋に書かれた手紙で、その頃いろいろな国の研究者によってなされていた原子核物理学での発見に、ローズベルト大統領の注意を向

けたのは、ドイツの数理論理学者でした。その物理学者によると、これらの発見を基に非常に強力な兵器が製造されるかもしれない、そうなるのであれば軍需工場で作られていた最も強力な爆発物もその兵器と比較すると時代遅れに見えるだろう、ということでした。アメリカ合衆国は、当時人間の発明の才が造ることのできるいかなる兵器においても、潜在的な敵に遅れをとるまいとしました。こうしてマンハッタン計画が着々と現実化していきました。数人のヨーロッパの科学者が、現在原子爆弾と呼ばれている物の実際の製造において、主導的役割を果たしました。このとてつもない爆弾が日本の都市の大部分を破壊したとき、トゥルーマン氏とチャーチル氏は、何が起こったかを、またそれが起こらなければならないとなぜ自分たちは信じたかを、世界に説明する必要があると考えました。それ以来、私たちは政治的・軍事的に新しい考え方をする時代に生きています——この人間の途方もない破壊能力が実証されたあとで、諸国民は共に平和に生きることを必ずや学ぶに違いないという希望と、このような教訓でさえ十分ではなかったかもしれないという疑念のあいだで、身を引き裂かれながら。

これは私の印象ですが、概して、この仕事に加わったアメリカ人もヨーロッパ人も、自分た

ちが創造したものをひどく嫌悪しています。かれらはおそらく、二度とそれが人間への攻撃に、とりわけ民間人への攻撃に使用されるのを見たくないと考えているでしょう。科学がこれまで人類に与えた衝撃のうちで、外国から来た物理学者とアメリカ人との協力で造りだされたこの不吉な産物による衝撃に勝るものはありません。残念なことです。原子爆弾を可能にした自然界の性質に関する偉大な発見は、私たちを寒々とさせました。物理学と呼ばれる人間精神のあの魅惑的な業績は、この国では少数のグループだけにしか十分に理解されていません。しかし、もし今度は私たちが攻撃を受ける番になったら、そのために起こるであろう恐ろしい結果を考えますと、身体が震えます。

そのあいだに、ヨーロッパ出身の物理学者とアメリカの物理学者の協力は大変親密になり、一緒に働いているときは文化的出自の違いが半ば忘れられました。でも、時々お互いをからかい合うことはありました。例えば、これまでになく大きく優れたサイクロトロンを製造するときなど、ヨーロッパ人は、いわゆるノウハウを強調するアメリカの傾向について親しみを込めて冗談を言うでしょう。他方アメリカ人は、ヨーロッパ人が数年ごとに頭の中だけで新しい宇宙を造ることがどうしてできるのかと尋ねて応戦するでしょう。もちろん、かれらの新しい宇宙のモデルに関する論文は、現代詩を読むのと同じように理解しがたい、とからかうことを忘れてはいません。

優秀な生物学者も移住してきました。そのなかの何人かの仕事は、以前からアメリカでよく知られていた方法に、生物系を研究する新しい方法を付け加えました。しかしながら、生物学における最も重要な進歩のひとつは物理学者によってもたらされました。正確に言えば、原子爆弾を製造した人たちの仕事によってもたらされました。この目的のために使用される「原子炉」は、原子爆弾のなかで爆発する物質をつく

りだすだけでなく、それほど有害ではない物質をも生みだします。これらの物質の原子は、炭素や燐などの普通の原子と化学的には同じものですが、放射能があるという点でそれらの同族物とは異なります。これが意味するのは、放射性物質は周りの物質に電気的変調を引き起こすことによってみずからの存在を知らせますので、これを追跡することが容易である、ということです。さて、つい最近まで生理学者は、有機体のなかで種々の化学物質が辿るコースを追跡するのにかなり苦勞してきました。現在では、このような困難は次第に克服されてきています。なぜなら、新しい放射性原子がこれまで普通に使われていた物質にとって代わると、放射性原子はこれまでと同じような化合物を形成し、その化合物に含まれてこれまでと同じ所に運ばれていきます。有機体のなかでの正常な進行過程にたいする重大な干渉は存在せず、しかも、この過程における重要な化学物質の分布を高感度の電気装置で追跡することができます。そういうわけで、この新しい元素は「追跡子」と呼ばれます。もっぱら人体中の放射性原子の進路に関連した生物学と医学の分野では、文献全体が急速に増えつつあります。正常な有機体の過程の生理学だけでなく、ある種の病気の研究も、この優れた方法から大いに利益を得るのは、理の当然です。長い目で見れば、同じ原子炉でつくられた爆弾でこれまでに奪われたよりもはるかに多くの人命を、このようにして救うことができるかもしれないことが分かれば、外国から移住してきた物理学者もアメリカの同僚たちも、かなり気持ちが安らぐでしょう。

この例では、物理学者の生物学にたいする貢献は、もともとは別の目的をもっていた仕事の副産物にすぎませんでした。しかし最近では、かなり意図的に生物学的研究に方向転換した物理学者がいます。これは少し前にヨーロッパで始まった新しい展開ですが、現在アメリカでは、たいていは海外から移住してきた物理学者の影響下で広がりつつあります。ひとつの方向だけで

はありませんが、物理学は今ではずいぶん遠くまで発展しましたので、物理学の境界内では、同じ方向での進歩はほとんど不可能です。しかし、優秀な物理学者をやめることはできないようです。境界に達したとき、その向こうを見るのは自然なことです。もし目に入ったものが面白そうであれば、やがて境界を越えて向こう側で仕事を始めます。今や、物理学の向こうには生物学が広がっています。その結果、最も優秀な物理学者と化学者のなかには、生物学の基本的な問題を研究している人たちがいます。例えばこの人たちは、ウィルスの研究で長足の進歩を遂げつつあります。この奇妙な病原体の行動よりも魅惑的なものはありうるでしょうか。その行動は、ある点では生物の行動と比較されることもあります。別の点では巨大な分子の行動と比較されることもあります。多分、そのような研究は医学にも重要な影響を及ぼすことが判明するでしょう。なぜなら、私たちが皆知っているように、いくつかの危険な病気が発症するのは、細菌よりもむしろウィルスが有機体に侵入したときだからです。

ヨーロッパから移住してきた物理学者と化学者が研究しているもうひとつの生物学における基本的問題は、光合成の問題です。たいていの植物は、日光の助けを借りて単純な化学物質を組み合わせて有機化合物をつくるという天賦の才をもっています。光合成がなければ、人間は存在しないでしょう。食物がなければ私たちは生きることができません。その食物は、植物あるいは動物のなかにつくられる有機物質からできています。前者の場合、その有機物質は、光合成のおかげで存在しているより単純な有機化合物からつくられます。しかも光合成は、後者の場合においても、私たちの食物の究極の源泉です。なぜなら、突き詰めて考えれば、多くの動物が植物を食べ、こうして光合成によって作りだされた化合物を消化吸収するからこそ、動物の生命は可能になるわけだからです。明らかに、私たちが肉食動物の部位を食べるときも、

私たちの食物の源泉はやはり同じです。このように、光合成は一般生物学のなかでキー・ポジションを占めています。ですから、もし精密科学がこの過程を完全に明らかにすることができたら、より一般的な原理から見た生命の理解は、大いに前進するでしょう。

さて、私自身の専門分野である心理学の話に移りましょう。しかし、まず区別をさせてください。多くの心理学的な智慧は、セルバンテス、シェークスピア、19世紀の偉大な小説家たちに見いだされるかもしれません。この意味での心理学は、いま私が携わっている心理学、つまり科学であることを主張する心理学において重要な役割を果たしてはきませんでした、と残念ですが言わざるをえません。したがって、前者は私のお話から除外しなければなりません。また別の理由で、精神分析と社会心理学の混合物が幅をきかせているある分野を論じることはできません。この分野における2つの発見についてのみ言及させてください。日本の少年の教育は非常に厳しい。だから大人になった日本人は攻撃的で、戦争を始める。あるいは、ロシア人の赤ん坊は極端に窮屈なオムツを身に付けさせられる。それゆえ成人したロシア人は他国民に親切ではない。このような因果関連を発見した成人たちが、自分たちの主張の正しいこと証明する必要をまったく感じなかったのは、とっくの昔に捨ててしまったオムツのどのような付け方が原因となっているのでしょうか。この証明の必要性は、私たちが科学と呼ぶものにおいては非常に強く感じられていますので、発見そのものはここでは無視しなければなりません。以下では、心理学のうちでも、知識の確固たる中核が次第に確立されつつある部分について、主にお話しします。

アメリカの心理学はただヨーロッパからの移住の影響を受けてきただけだったと言うと、それは誤解を招くことになるでしょう。この点で、心理学の発展はその他の自然科学の発展とまっ

たく異なっています。というのもしかに、総じてアメリカの心理学は、60年あるいは70年前に、ヨーロッパから人間と考えが移ってきたことによって作りだされたといえるからです。しかも、その後次から次へとヨーロッパの心理学者がこの国にやって来て、ムッソリーニやヒトラーが政権を握るずっと前から、なんらかの形でアメリカの心理学の研究方法に影響を与えました。30年代に移住してきたヨーロッパの心理学者は、さらなる発展にもはや決定的な影響を及ぼすことはありませんでした。こういう事情のために、私は話をヒトラー以後の時代に限定することはできません。もっと前の時代を顧みなければなりません。そして、科学としての心理学が最初どのように輸入されたか、そのときアメリカがどのように反応したか、そして多くの心理学者が次々と外国からやって来たとき、アメリカが今度はどのように反応したか、こういったことを説明しなければなりません。専門的事柄をここで説明することは勿論できません。むしろ、私が言わねばならないことは、多くの人が関心をもちそうな問題に関することでしょう。なぜなら、私の主たるテーマは、アメリカ心理学の歴史に特徴的な傾向が、アメリカとヨーロッパ両方の個人やグループが抱いていたもっと一般的な信念から、どのようにして生まれたかということだからです。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカの学生人口が異常に増えはじめ、若者たちが初めて科学の業績を耳にしたとき、陶酔的ともいえる影響を受けた者たちがいたに違いありません。しかし、自然科学がこのような感銘を与えることができたとすれば、ほんの少し前にドイツ人が精神についても厳密な科学の確立に成功したというニュースは、どんなに魅惑的に思われたことでしょう。新しい学問はその発祥の地で学ぶのが最善であることは明らかです。というわけで、アメリカの心理学が誕生したのは、多数の若者がまずドイツに行ってライブツィヒのヴントのもとで実験心理学を学び、それからア

メリカに戻り、すぐさまドイツ式の心理学実験室を設立したときです。その結果、初期のアメリカの心理学はまぎれもなくヨーロッパの香りがしました。また、このようなことが起こりました。ほどなく少数のヨーロッパ人がやってきました。彼らはみな同様にこの新しい科学に熱狂的で、アメリカ人よりずっとよく知っていましたが、少なくともそのなかのひとりであるイギリス人ティッチェナーは、ヴント心理学の権威であっただけでなく、実力のある人でもありました。当時ドイツ人は2つの研究手法を用いていました。ひとつは実験と測定で、これは感覚と記憶の分野で好まれました。もうひとつの研究手法では、単純な人間の経験が熟練した観察者のなかで確認され、次いで批判的に精査され、ついにはもはやいかなる不純物によっても変色されていない経験の本質が最終的に示されました。ティッチェナーやその他の人々がアメリカの学生に奨励したのは、これらの研究手法でした。

いずれの方法もハーバードのウィリアム・ジェームズには魅力のないものでした。彼は、人間の精神に去来するいかなるものへも目を開き、そこで見出したものを大論文にまとめあげたところでした。彼が新しい心理学に向けた軽蔑を単にアメリカ的な反発として片づけることはできません。むしろそれは、たいていの人々よりも生命を強く感じ、哲学的問題に強い関心をもち、そして絶えず均整のとれた感覚をもっていた人の反応でした。新しい試みは、科学的装飾を信じがたいほど身にまとい、哀れなほど視野狭小で、ほとんど耐えられないほど退屈だ、と彼には思えました。新しい心理学者たちが測定したものがとるに足りない感覚の微妙な違いのようなものだとしたら、かれらはそもそもなぜ測定するのだろうか。測定のために測定を始め、そのため測定対象となりうる些細なことだけを論じ始めるようになると、より重要なものの存在が結局は無視されてしまう、と彼は強く感じていました。間違いが自然科学のどこか片隅でなされているなら、このような形で害が及ぶよ

うなことはほとんどないでしょうが、問題となっているテーマが最も重要な人間自身の性質であれば、結果がひどいものになることは必至でした。世界のこの部分は、どんなことがあっても、たとえ科学の名においてであろうと、歪められてはならない、とジェームズは感じました。ある種の科学者たちの偏狭な態度に憤激して、*Fiat scientia, pereat mundus* (科学は行われよ、たとえ世界は滅びようとも) というスローガンはかれらにこそふさわしい、とウィリアム・ジェームズは考えたことを思い出します。このスローガンを大まかに訳すと、こうなります。"Science comes first. If meanwhile the world goes to pieces, we do not care."

一方、新しい心理学者たちは、ウィリアム・ジェームズにほとんど注意を払いませんでした。なぜなら、より広い視野を必要としたジェームズは、多くの日々を実験室で過ごすことをしなかったからです。つまり、測定されているものに興味がなかったため、彼は測定することを拒否しました。彼にとっては、個々の項目で科学に似たことが心理学で可能になってきたという事実よりも、精神生活のドラマ全体のほうが比較にならないほど重要であり続けました。明らかに彼は決して科学者ではありませんでした。ジェームズの見解と実験最優先の心理学者の見解のコントラストは、今なおある程度は存在しています。そしてそれは、科学的心理学がその大きな任務に十分ふさわしくなるまで、完全になくなりはいけません。

私は、この新しい科学において最初に奨励された2つの研究手法について述べました。種々の実験方法と、ある種の心理的データそのものを辛抱強く観察する方法の2つです。後者の研究手法はアメリカでは長いあいだ受け入れられませんでした。忍耐力のない若いアメリカの研究者たちはすぐ次のような疑問を呈したものです。「人間経験の最後の変動しない要素が十分に精査されるまで、心理的事象の研究を先送りするのはですか。実際に起こっていること、つまり精

神の機能の研究をなぜすぐに始めないのですか。」かれらがこう述べるやいなや、さらに大きな声が上がリ、心理的データ自体の精査という第2の研究手法は完全に放棄すべきだと主張しました。この声は初期のアメリカの行動主義者のものでした。かれらはこう言ったものです。「これは何ですか。科学ですか、それとも古めかしい哲学的思索の別バージョンですか。私たちは、心のなかで起こっていることを調べるよう求められているのです。科学者として、私たちはこのような意見には強く反対します。いわゆる心理的事実というものは、真の科学が自信をもって論じることのできる題材ではありません。科学では、誰にでも利用できるものだけを観察します。それ以外のどんな観察も客観的と呼ぶことはできません。しかし、心理的データの精査といわれているものにおいては、その人以外の誰も利用できない純粋に主観的な現象が、問題になっているのです。さらに悪いことには、ある人において本当になんらかの心理的事実があったということに、次の人はまったく確信をもつことができません。ですから、心理学者は、物理的な音としての被験者の声、顔の動き、あるいは体の別の部分の動きだけを研究すべきです。言い換えれば、心理学の研究手法が科学的であると主張するかぎりには、研究手法は行動に限定されなければなりません。」

行動主義者が書いた以上に「科学」という言葉が大きな頭文字で書かれたことはないだろう、と私は思います。もちろん認識論的には、かれらの議論はかなり素朴なものでした。かれらの議論は、次のようなことを根拠に簡単にひっくり返すことができます。それは、いかなる物理学者も、そしていかなる行動主義者も、行動主義者がたいへん好んだ客観的事実を直接に観察することはできない、ということです。そのような事実は、知覚によってしか知ることができません。つまり、行動主義者が扱いたくなかった主観的現象のひとつによってしか知ることができないのです。現時点では、もはや私たちは、

このような間違いに興奮するようなことはありません。若気の至りということでしょう。成熟するには時間がかかりますし、経過の速度を大幅に速めるような処置も、歴史には存在しないようです。また、公平を期すために付け加えますが、過去40年のあいだに行動主義はかなり変わりました。現在の態度には、初期の発言に見られたよりもはるかに洗練されたところがあります。しかしながら、実際に大なる成功を収めたのは、まさにこれら初期の発言でした。この輸入科学のなかの心理的データの精査を扱う部分は、驚くほど短期間に衰退しました。以前のティッチェナーの教え子たちさえも、次第に新しい宗教に改宗しました。そして私がこの国に初めてやって来たとき、ある若い心理学者は、まだ完全には納得しているわけではありませんと、ためらいがちに告白しました。彼がどちらの道を選ぶようと、彼の周りにいる心理学徒は、今やことごとく行動主義の言語を話していました。

これら全てが結局どうなったかという、当然のことながら、かなり狭い分野の新研究としてドイツからやって来た実験心理学は、しばらくするとこの国でさらに狭くなっていきました。いつまでも心理的事実を疑問視する行動主義者は、そのような事実がある人から別の人に伝えるための手段である言語さえも、恐れているようでした。ともかく、この新しい学派の多くのメンバーは、話のできる人間からそっぽを向き、口の利けない動物と仕事をすることを選好しました。しかしこのようにして、心理学の視野が一方向にひどく狭められようと、この若い科学はその新しい方向に急速に拡張していきました。動物心理学者は次から次へと研究方法を發明して、目下かれらの方法はわれわれの有する最善の方法です。同じくらい幸運なもうひとつの発展が、間もなく起こりました。動物を自然界のなかで生きている状態のまま扱っていたので、行動主義者のなかには、心理学的実験と生理学的手法を組み合わせることを学んだ人々もいました。その結果が、いま私たちが生理

心理学と呼ぶものでした。まさにその当初から、生理心理学は主としてアメリカ特有の新しい研究でした。ラシュレイ教授と彼の学生たちの業績に比肩できるものは、世界のどこにもほとんどありません。知的文化の歴史においては、奇妙なことが起こるものです。ある時期、実質上みんながある過ちを犯すとき、まさにこの過ちが時には幸運な結果をもたらすのです。

しかしながら、その反対のこともまた起こる、ということを否定できません。ある時代のまさに手柄が、しばしばちょっとした付随的過失を生み出します。現在、行動主義者が科学を讃えたことに誰が異論を唱えるでしょうか。しかし、不幸なことに、この賞賛があまりにも度を超していたので、人間の道具となるはずだった自然科学の概念と方法が、やがて心理学者の支配者となる脅威が生じてきました。それまでの科学によって敷かれたレールをもちや走ることができなくなると、新しい科学者たちは非常に混乱するでしょう。事実を扱うよう求められても、そのようなものは自然界のなかには決して見つかりそうにもないので、かれらは恐れると同時に憤慨するでしょう。いま述べたことを具体的な事例によって説明することが、私の次の任務です。

しばらくすると、ヨーロッパの心理学者のなかには、実験科学への過剰な情熱から回復した人々もいました。科学的心理学の初期にはほとんど熱病のようになっていたに違いないあの情熱からです。そのなかのひとりであるウィリアム・マクドゥーガルは、行動主義者がヨーロッパでは見たこともないような高熱を出しているとき、オックスフォードから移住してきました。渡米するとすぐに彼は行動主義の前に立ちほだかり、おおよそ以下のようなことを述べました。

もちろん自然科学の掟は守らなければなりません。しかし行動主義者は、このような掟のひとつで、実は第1位にランクされるべき掟に言及するのを忘れていました。私たちがいる分野であ

るものを観察し、特にいつでも観察するのであれば、このような観察は、どのような状況下でも、他のところで何が起ころうとも、受け入れられねばなりません。さもなければ、この分野での活動が、どうして経験科学という名で尊敬されるべきでしょうか。しかしながら、行動主義者は、この掟に言及しそこなただけではなく、これに絶えず違反してきました。この奇妙な行動の理由は何でしょうか。理由はひとつしかありえません。つまり、こうすることでかれらは、自分たちの特定の哲学に適合するような事実を選ぶことができ、適合しないものをすべて無視することができたのです。ところで、明らかに適合しないものがあります。迷路のなかのネズミを注意して見てみなさい。ネズミの行動の最も顕著な特徴は努力 (*striving*) です。常にこの生き物は何かを追っているか、何かから逃げようとしています。もちろん人間の場合も同じです。このなかには、なんらかの目的である経験的データを選び、他のデータを認めようとしないう行動主義者も含まれます。努力は精神生活のまさに本質です。実際、行動主義者は、自分たちの未熟な科学を宣伝する前に、生命のもっと基本的事実を学ぶべきです。

このイギリスから来た移住者の言わんとすることの精神は、文字通りではないにしても、以上のようなものです。残念なことですが、マクドゥーガルは、彼の後年の仕事で、行動主義者がちゃんと遵守したその他の科学の掟に必ずしも従いませんでした。このことほど、彼のアメリカの心理学にたいする影響を弱めたものはありません。しかし、彼が稀にみる勇敢な人だったことに疑問の余地はありません。科学者のすべてが、多くの同僚が従っている流れに逆らって、あえて反対方向泳ごうとするわけではありません。しかも、彼の主要な命題は、ウィリアム・ジェームズのそれとまったく同様に、疑いなく正しかったのです。

マクドゥーガルが以上のように述べたあとに

起こった大騒ぎは、ものすごいものでした。厳密に科学的な心理学の旗を高く掲げ、直ちに行動主義者は次のように反論しました。「マクドゥーガルは、明らかに肘掛け椅子に座った心理学者であるだけではなく、いっそう悪いことには、中世的思索に逆戻りしてしまった哲学者である。自然には目標や目的があるという考えを捨てたとき、科学はその近代的発展を開始したのではないだろうか。もしこのような中世的な観念が心理学において容認されていたとすれば、この新しい科学が繁栄を望むことなどできなかったであろう。」これに対してマクドゥーガルは平然としてこう答えました。「考えたり観察したりするさいの補助用具として、肘掛け椅子は、実験主義者が使う多くの機械装置よりたぶん優れた道具です。行動主義者の皆さんも、肘掛け椅子に座って思索に集中してみたいかがでしょうか。おそらく、これこそがあなた方の必要としている治療薬です。」

行動主義者はこのような発言を好みませんでした。そして、マクドゥーガルの観察は、いかなる実験によっても裏付けられてはいないけれども、心理学において真剣に考慮されるべきだという提案を、かれらは憤然として拒絶しました。この新しい科学では、観察の方法や事実の基本的特徴を含めて、すべてが自然科学におけるのとまったく同じでなければなりません。愛は人を盲目にするといいますが、科学へのある種の愛もまたそのようです。私がこの国に初めて来て間もない1925年に、私は奇妙な経験をしました。心理学を学んでいる大学院生と話をしたときのことです。彼はもちろん行動主義者でした。私はこう言いました。マクドゥーガルの努力の心理学は、私には受け入れ難いある種の哲学的命題と結びついているように思えます。しかし、それにもかかわらず、単純な観察の問題として、人間はある目標に達するためにあれをしたりこれをしたりすると主張した点で、彼は正しかったでしょう。そしてその学生に、「あなた自身、切手を買うために時々郵便局

に行きませんか。今はちょうど来週の木曜日に行われる試験にそなえて準備をしているのではありませんか」と尋ねました。即座に答えが返ってきました。「私はそんなことを決してしません」と彼は言ったのです。堅固な科学的信念に比肩できるものは何也没有ありません。

私たちはもう一度、ヨーロッパの心理学がアメリカの心理学の発展にインパクトを与えた状況は、ヨーロッパの物理学者が30年代に移住してきたときの状況とはまったく違っていったことに気づきます。これらの物理学者がやって来たときには、基本的な事実は何か、主たる研究手法はどのようなものか、物理学者の基本的な任務は何かについて、なんの疑問もありませんでした。したがって、個々の物理学者がどこで生まれたかに関係なく、かれらは十分に確立した体系のなかの同じ場について新しい発見をしようとしていました。他方、マクドゥーガルのようなヨーロッパ人がアメリカで耳を傾けてもらおうとしていた当時は、心理学は幼児同然でした。まだ若い科学においては、個々人の出自や出身国の違いが科学的な研究手法に強い影響を及ぼすのは必至です。もちろん物理学者たちも、厳密に言えば科学的な証拠だけからは導かれない信念を背景をもって研究しています。しかし物理学においてはそのような信念は、少なくとも、すべての物理学者が共有する龐大な知識の制御下にあるため、かれらの信念にはかなりの均一性が見られます。マクドゥーガルが批判を展開していた当時は、心理学者たちにはそのような共通の背景はありませんでした。今日でも、この若い学問においては、首尾一貫した知識の体系化はゆっくりとしか進んでいませんので、背景となる信念はひとりひとりの心理学者によって甚だしく違うことがあります。もちろん特定の科学を好む心理学者たちもまた、決して科学の結果ではない信念の影響を受けます。ジェームズやマクドゥーガルに精神生活のある局面を強く認識させたのは、通常の意味での特殊な科学的発見ではなかったかもしれませぬ。しかし、行

動主義者にこれらの事実を論じることを拒否させたのも、経験的な証拠でなかったことは確かです。かれらは、精神の分野を含めて、この世界で何が起こるかを知っていただけか、知っているか、知って思っていました。そしてかれらは、この世界で何が起こりえないかをさらによく知っているか、知って思っていました。こうした対立に関しては、異なった背景をもつ多くの人の研究の結果として、実際の知識が私たちすべてに共通の信念を抱かせるようになるまで、心理学の状況は変わらないでしょう。

科学的心理学は人間の創造物であるだけでなく、それはまた主として人間を論じるものです。したがって、中立的な事実の研究と考えられている自然科学では、一般的な信念は穏やかなものですみますが、心理学ではしばしば強力な信念が幅をきかせるという傾向が見られます。多くの場合、これらの信念はまさに人間の本質にかかわっています。人間について何をすることが許され、何をすることが許されないかにかかわっています。そのような人々は、他の心理学者たちが狭い科学の概念で精神生活を戯画化して描いていると感じたとき、心穏やかではいられないでしょう。他方で、そのように批判された心理学者たちは、自分たちの盲目を責めたこの批判によって不快にさせられるだけでなく、反対者たちが経験科学をすべての事柄の最終的決定者とみなすのを拒否するときは、憤慨もするでしょう。

臨床心理学で大いに利用されているものに、いわゆる投影テストがあります。患者はインクの染みやある場面を描いた絵を見せられ、その解釈を求められます。患者の解釈は、その患者のパーソナリティや精神的トラブルに関する多くの情報を含んでいると考えられています。さまざまな心理学者がどのような種類の人々であり、かれらが何を信じているかを知りたいとき、私たちはそのようなテストを必要としませぬ。心理学者は、かれらの論文や著書で——それほど詳しくはないとしても、少なくとも暗示的に

——必要な情報を私たちに与えたがっています。聡明な読者であれば、心理学者の研究の背後にどのような背景としての信念があるかをすぐに知るでしょう。なぜなら、ある場合に特定の主題が強調され、特定の説明が一貫して他の説明より選好されているだけでなく、まったく言及されていない主題があったり、可能であるにもかかわらず無視された説明があるからです。この種の証言は、インクの染みの解釈に劣らず雄弁です。しかし、心理学者によって信念が大いに違うのはなぜでしょうか。そうした違いの一部は、個人のパーソナリティ形成における先天的な相違に由来するものなのかもしれません。しかし、もっとずっと明らかなのがあります。それは、さまざまな心理学者がそのなかで育った文化的風土の影響です。マクドゥーガルは精神生活の性質に関するある信念をもってアメリカにやってきました。その信念は、彼自身の国の文化的伝統だけでなく、ヨーロッパ全般の文化的伝統によっても育まれたものでした。アリストテレス、聖アウグスティヌス、パスカル、スピノザは、ヒュームやスチュアート・ミルと同じように、この信念に関係がありました。行動主義者たちもまた、ヨーロッパからもちこまれていた信念をもっていました。この信念の源泉となった人々に傑出した人物はいませんでした。

ここで私は、文化的伝統を異にする人々の接触について、もっと一般的な所見を述べたいと思います。多くの人々、文化的伝統は例外なく主観的な事実だ——ここで主観的といわれているものが、たとえ歴史を通じてすべての人々のなかに確立した思想と感情の傾向であるとしても——と当然のように考えています。これが正しいとすれば、そのような伝統について議論するのはもちろん無益なことでしょう。実際、善意からでしょうが、次のように確言する人が時々います。さまざまな国の文化史に由来する人々の相違を決して話題にしないことにしさえすれば、この世界はもっとずっと平和なところ

になるでしょう、と。これは危険なアドバイスだと思えます。なぜなら、もし平和が、正当化できない文化的懐疑主義に基づいているとすれば、それはどれほど長く安全でしょうか。確かに必ずしも文化的伝統のすべての効果が理性的な議論の背後に潜んでいるわけではありません。なぜなら、特定の争点の重要性が、あるところでは明確に認識されていて、他のところではほとんど認識されていないなら、それはやはりそのような伝統によるものだからです。ある伝統の結果として、ある国にはたくさんの良い学校があるけれども、他の国にはわずかしかない、と仮定しましょう。この場合、2つの異なる国民の偏見の作用だけによってこうした結果になった、と主張することは可能でしょうか。確かに、世界のあちこちで見られるさまざまな信心や態度は、歴史的発展の結果です。しかし、このことは数学的知識にも当てはまります。数学の知識は歴史の産物で、それは周知のようにある国々では他の国々よりも早く発展しましたが、数学は国民的偏愛の表現であると結論づける人はいません。ですから、どうして特定の文化の他の産物はすべてこの意味で主観的であると断言するのでしょうか。文化的伝統のいくつかの側面は、もちろん、個人が一定の個人的な好みについてとやかく言うのを慎むのと同じように、真剣な討論の題材にはなりえません。例を示すまでもないでしょうが、政治的信念を実行しようとする際、その実際の結果を考慮に入れて慎重に行動するようしつけられたイギリス人を仮定してみましょう。そのようなイギリス人が、フランスの伝統的形態の議会運営は早晩フランスを破壊することになるだろうとフランス人に語ったとすれば、彼の意見はイギリスの偏見の表明にすぎないのでしょうか。もうひとつ例を挙げれば、アメリカ合衆国の生活を研究したフランス人が、多くのアメリカ人は自分自身のために働きすぎると言ったとすれば、彼の判断はもちろん自国のある伝統に適っているでしょう——批判されたアメリカ人の行動がアメリカの

伝統、おそらくピューリタニズムの伝統に合致しているのとまったく同様に。しかし、このフランス人は誤っているということになるのでしょうか。たいていの場合、国民的伝統は、害のないローカルな主観や短所だけでなく、国民的美徳をも含んだ混合物です。ほとんどすべての国の文化の型には、他の国々では同程度には発展していない徳性がしばしば存在します。だとすれば、ある国はすすんで他の国の教師にも生徒にもなるべきです。明らかに私はここで、ある状況でたまたま教師である者は、最大限機転をきかして事に当たり、次回には生徒の役にまわるよう常に準備している、ということを想定しています。

このことは、もっと一般的な問題に当てはまるのとまったく同様に、ヨーロッパから来た心理学者とかれらのアメリカの同僚との接触にも当てはまります。私の知るかぎり、アメリカの心理学者とヨーロッパの心理学者との論争が、いわゆる国粋主義的な敵対関係に至ったことはありません。しかし、このことを承認するとしても、次のことは繰り返し言わなければなりません。異なった文化的伝統に由来する心理学上の意見の相違すべてが、その起源のゆえに、あっさりとして無視されてはなりません。むしろ、そのようないくつかの相違は議論の明らかに適切な主題です。あるローカルな伝統に主に見られる精神生活にたいするさまざまな見方は、異なった伝統をもつ心理学者から大いに注目される価値があります。同じことは、科学的研究手法に関するローカルな相違によりいっそう当てはまります。簡単な例として、次のことを申しあげたいと思います。この国にやって来た多分すべての心理学者は、実験による証明について以前よりもずっと厳密になるべきであることをアメリカの同僚から学びました。この点ではアメリカの伝統のほうが優れていました。しかし、アメリカ人たちも、ヨーロッパから来た者たちからすすんで学ぼうとしました。科学的心理学は努力や目的といったものにかかわるべきかどう

かという大問題は、出身地の違いと関連づけられていましたが、それも長くは続きませんでした。実のところ、目的が心理学の諸概念のなかで中心的な位置を占めねばならないことを最初に認めたのは、行動主義者であるカリフォルニアのトルマン教授でした。彼はまた、目的の精密な実験が可能であることを示すことによって、他の行動主義者たちを納得させました。

思いおこせば、しばらくのあいだ、目的は、自然科学でそれに対応するものがなかったために、心理学で受け入れられるようには見えませんでした。しかし、私たちは別の困難があることに気づきました。若い心理学の師として、伝統的な科学の精神は、ある種のテーマに異議を唱えたばかりでなく、特定の研究に観察を制限しました。何を根拠にしてマクドゥーガルは、目的の研究は心理学の主要な課題であると主張したのでしょうか。彼は、どんな実験結果も、どんな統計数値も提出しませんでした。こういう事情では、心理学者が彼に耳を傾けなくても当然です。

目下のところ、この議論は幸運にも広まっていますが、それは大いにわれわれの注目に値します。なぜなら、それはなおときどき新しい事実にたいする心理学者の態度を規定するからです。実験心理学で今日一般に用いられる研究手法のほかならぬ優秀さが、その研究の範囲を制限しがちです。というのは、あまり印象的でなくある意味ではあまり精密でないけれども、絶対に欠かすことのできないより簡単な形態の観察が、徐々にまったく人気のないものになってしまったからです。こうした観察を弁護するために、少し述べさせてください。

まず第1に、実験は定量的な研究手法である必要はありません。新しい分野で解明をめざす最初の試みは、研究者がさまざまな条件のもとで起こることを定性的な仕方でも観察するなら、それによってしばしば大いに促進されるでしょう。この種の傑出した仕事は、ときどき現代物理学においてすらなされています。第2に、きわめて

重要な意義をもつ観察が、いかなる意味での実験もなしに行われることもあります。当然にも、ヨーロッパから来た心理学者は、アメリカの同僚以上に、これが正しいことを認めるのに躊躇しないでしょう。なぜなら、非常に簡単な心理学的観察は、心理学が実験的方法を用いるようになるずっと以前から、ヨーロッパの文化的伝統の一部をなしていたからです。アリストテレスは観念連合について知っていました。アリストテレスとアラブ人は、月が中点にあるときよりも地平線近くにあるときのほうが大きく見えることをよく知っていました。レオナルドは、さまざまな色によって形成される珍しい体系を研究しました。コントラスト、残像、暗闇への適応は、1800年頃にかなり一般的な関心を惹いた事柄でした。マクドゥーガルが精神生活における目的的事実上の遍在を指摘したとき、彼は自分にとって平明な事実と思われるものを単に報告しただけなのです。そのような事実として、その後それは実験の問題となりました。心理学において現在は実験的に研究されている他のテーマも、同じようにささやかな出発点から始まって私たちに伝わっていることを、忘れないようにしましょう。エビングハウスが、ある形態の記憶を非常に精確に研究することを可能にした方法を考案したとき、この分野での彼の最初の問題は、明らかに、いかなる実験の助けもなく獲得された記憶についての知識から導きだされたものでした。誰でも似たような知識を、心理学のあれこれの分野で得ることができます。この目的のために必要なのは、事実に関心をもち眺めることだけです。過去においてはこうしたやり方で心理学のために多くのことが得られましたので、現在および未来において同じ直接的な観察を軽蔑するとすれば、それは明らかに危険な態度でしょう。よりいっそうの証拠は、それが特殊な科学の道具でもってすでに磨かれている場合にかぎり、受け入れられるべきでしょうか。私としては、このような方針をまじめに推奨する人がいるだろうと考えることはできま

せん。それは、私たちの研究をその現在の範囲を超えて広げる最高のチャンスを、私たちから奪うことになるでしょう。

こういった点を心に留めて、今度は、別の心理学の概念がヨーロッパから輸入されたとき、何が起こったかを見てみましょう。その概念は洞察 (*insight*) です。それはゲシュタルト心理学者たちによってもたらされました。誤解の雲がなおその意味を隠しているように思われますので、簡単に説明しておいたほうがよいでしょう。所与の体系が一定の条件にたいしてどのように反応するかを物理学者が発見しようとするとき、彼は2つの事実を観察します。すなわち、体系が置かれている条件と、体系それ自身の行動です。次いで条件が変えられ、それに対応する変化が体系に生じれば、新しい条件と新しい体系の状態の両者が記録されます。最後に、結果が集められ、2列の表がつけられます。ひとつの列には、適用されたさまざまな条件が列挙されます。もうひとつの列には、それに対応する体系の状態が示されます。十分慎重に、なんらかの付加的なテストで確認されたあとでは、再び同じ条件が与えられれば、体系はもう一度同じ反応を示しますから、2列のデータの関係は因果法則を表しています。物理学者は、そのような因果関連を観察できるとは主張しません。反対に物理学者は、自分の分野ではそのような観察は不可能であると主張します。それでは、2列のデータの関係は実際の因果関連によって生みだされたものではなく、偶然の所産ではないのかという可能性から、物理学者はどのようにして身を守るのでしょうか。彼には直接の観察によって決定する手段はありませんので、ある間接的な判断基準に頼ります。この状況での彼の研究手法全体は帰納と呼ばれます。それは誰もが満足のいく推論です。実に奇妙なことに、なぜ帰納法を強い自信をもって使用できるかを、正確に私たちに説明できた科学哲学者はこれまでのところいません。

最初のゲシュタルト心理学者たちがこの国に

やって来たとき、かれらがアメリカの友人たちに納得してもらおうとしたのは、この点で心理学における観察はしばしば自然科学における観察よりも優れているということです。心的事実は常に決して分離した出来事として経験されるのではない、とかれらは言いました。むしろ、ある心的事実に気づくとき、私たちは同時にこれらの事実の因果関係にも気づくのです。実際に、この種の事例は精神生活のあらゆる時点で起こっており、最もありふれた経験のひとつである、と移住者たちは主張しました。例えば、誰かが万年筆とインク瓶を続けて持ち上げて、「インク瓶のほうが重い」と言うとしましょう。この発話は、分離されたもうひとつの出来事として、彼の先の行為に続くものでしょうか。もし尋ねられれば、きっと彼は、これは単なる時間的な連続の問題ではない、と答えるでしょう。彼は多分こう言うでしょう。「私は話すときはわけの分かることを話しています。例えば、この場合では、私は、自分が知覚したばかりの関係について語っていること、そして私の話の方向は2つの対象を比較したときに気づいたことによって明らかに規定されていることを、知っています。さらに、インク瓶のほうが重いということは、私がこれらの対象についてもった印象の性質から生じました。」

例をもうひとつ挙げます。若い男が美しい顔のすてきな女性の姿を見て、その完璧な美しさの方向に心が動くとき、このすばらしい条件と体系としての彼自身の感情転移が因果関係にあることを発見するために、彼は帰納という間接的な方法を必要とするでしょうか。必要だと言う人はほとんどいないでしょう。心理的な因果関係はもちろん反対方向にも作用するように感じられることもあります。毎年3月15日以前に、なにかが広げられている書き物机を迂回し、ほかのことに気をとられていたことの口実をあれこれ探す人たちがいます。これは回避反応と呼ばれます。この種のたいていの反応では、回避する人たちは自分が何を避けているかを完全に

知っています。また、われわれのこの例では、回避される対象の性質は、かれらが避ける最も自然な原因のようにかれらには思われます。彼を恐れさせたものは机の上のある本の形ではなく書式1040であることを、帰納によって発見しなければならない人を想像してみてください。

これらすべては、ゲシュタルト心理学者が「洞察」と呼ぶものの例です。かれらよりも少し前に、哲学者のヴィルヘルム・ディルタイが *verständliche Zusammenhänge* (理解できる関連)——英語では "connections which are understood"——に言及したとき、彼は同じ事実を考えていました。物理学における要素的な結びつきが理解できないのは、私たちがたっただけに見たように、物理学者はそのような結びつきをそもそも観察することができないという単純な理由によります。物理学者は連続的な随伴現象という事実を観察するだけで、因果関連が実際にどのようなものであるかを私たちに語ることはできません。しかし心理学では両方の関連が問題になります。すなわち、私たちが経験し理解する関連と、物理学者が自分の分野での関連について知っている程度にしか、心理学者も知らない他の関連です。「洞察」という用語が多く心理的状況の紛れもない特徴を指しているとゲシュタルト心理学者たちに確信させたのは、まさしくこのコントラストなのでした。しかし、洞察がいわゆる人間経験の内容を数えあげるときに、列挙しなければならないもうひとつの項目にすぎない、とかれらは言おうとしたものではありません。むしろ、かれらが提案したのは、心理的事実のあいだの因果関係に気づくことは、精神的活動が辿るコースを大きく左右する、ということです。例えば、そもそも「考える」ということは、かれらの観点からすれば、洞察なしには不可能です。

これまでのところ、この国の心理学者たちは、私がいま述べたような観察にあまり関心を示してきませんでした。しかも、これにはほかならぬ精神的世界の構造がかかわっています。心理

的状況に私たちが気づくことが、物理学者がその観察から得るのと同じ種類の証拠しか私たちに与えてくれないとすれば、そのような状況は、関数的な関連をもたない事実の配列のように見えたでしょう——この分野が帰納法によって研究されるまでは。そして同じことは、私たちの心理的連続の認識に当てはまるでしょう。この場面のある部分が他の部分と因果的に関連していることを実際に経験するのですから、この洞察を無視する心理的過程の扱いは、それがどのようなものであれ、言うまでもなく、まったく誤りにつながります。

アメリカの伝統は非実験的な観察を嫌います。したがって、洞察という概念が導きだされたような単純な種類の証拠に基づいてあまり多くのことを主張しないほうが賢明だとされてきたでしょう。洞察が行われる条件、および洞察が得るかもしれない結果は、確かに完全に正統的な実験によって研究できます。この種の仕事をしているわずかなアメリカの心理学者がもっと強力に支持されていたなら、洞察そのものは、それが最初に観察された仕方にもかかわらず、すべての人に徐々に受け入れられたでしょう。正確な研究手法を重視するアメリカの主張と、正確に研究されるべき現象をまずよく眺めてみようとするヨーロッパの傾向を結びつけることは、明らかに可能であるにちがひありません。いずれの傾向にも、それぞれ良い点と弱点があります。2つの文化的伝統の接触において常にそうであるように、両者の弱点が相殺しあい、長所が協力によって伸ばされるなら、最高の成果を期待してよいでしょう。

私たちが心理学において悲観主義者になる理由はまったくありません。私たちはこの科学で多くのことをすでに知っています。ウィリアム・ジェームズが私たちのしていることを見ることができれば、彼の判断は確実にもっとずっと好意的になるでしょう。私たちの知見にはいまだに望ましいと思われるほどの一貫性がないという事実を彼は批判するでしょう。しかし、こ

の批判は今のところはおそらく正しいとされるでしょうが、だからといって私たちは落胆する必要はありません。科学における事実、おのずから、体系をなし、首尾一貫したものになるものです。最近私は心理学の地面に耳を当てて聞いてみました。下のほうでは、心理学の知見が、ワインがフランスの地下貯蔵室で貯えられるように、貯えられていました。この地下貯蔵室でワインは成熟し、味はより良くより強くなっていきます。より良いものに仕上げるのは、多分ゆっくりとした化学反応です。似たような発酵作用の結果、心理学の生産物は今ますます力を増しつつあるように、私には思われます。少なくとも私が聞いたかぎりでは、われわれの地下貯蔵室で明らかになにかが起こっていました。私たちは、われわれの飲物ができあがるときの準備をすべきです。しかし、私たち全員にその準備ができていますでしょうか。ワインの比喩はさておき、心理学者は、過去の議論にいささか疲れ、そのために大きな問題に関心がないような印象を与えるときがあります。このような気分では心理学者は実験に基づく研究を次々とするでしょうが、自分が安全だと感じる限られた領域内にとどまるのを選ぶでしょう。その結果、心理学にある種の保守主義がはびこることになるならば、それはきわめて不幸なことでしょう。実際に、特に優れた人々でさえ、ときにそのような態度を奨励しました。例えば、心理学は今や折衷主義に向かっている、と肯定的に言われたことがあります。心理学では中道路線を進むのがよいという声が再び聞こえます。私はこのような対処法には同意できません。というのは、そのような対処法に従うとすれば、心理学者はなによりもまず後ろ向きにならなければならないでしょうから。折衷的な態度をとるとすれば、かれらはすでに手近にある考えばかりに関心を寄せるでしょう。そして、心理学の中道を見出そうとして、かれらは他の心理学者がそれまでに辿った軌道に多大な注意を払わねばならないでしょう。もし研究において安全が重要な問題で

あるならば、そのような態度はおそらく推奨できるでしょう。実際には、この分野ではそのような場所はありません。研究においては、私たちは前を向いて危険を冒さなければなりません。

科学におけるわれわれの偉大な祖先たちがこのような問題についてどのように感じていたかを見るのは、興味深いことです。少なくともこの点では、後ろを振り返ってみるのも有益なはずです。そこで私はつい最近、物理学の歴史に向かいました。そこで私が見出した最初の人はいはガリレオでした。明らかに彼はまったく折衷的な気分ではありませんでした。というのは、彼はちょうど、『天文学対話』のなかの、アリストテレスの物理学と天文学への破壊的な攻撃の最後の文を書いているところだったからです。彼の表情は硬く険しかったので、アリストテレス派の人たちに実際に本を投げつけるのではないかと恐れられました。次の話は私が眠っていたときのことで、私はファラデーに会った夢を見ました。「あなたはいま何を研究していますか」と私は彼に尋ねました。するとこの偉大な男は答えました。「あいにく私にはお話しする時間がありません。私は物理学の全領域で図と地を逆にするのにとっても忙しいのです。その結果は場の物理学と呼ばれるでしょう。」明らかにファラデーは、自然科学における中道について聞いたことすらありませんでした。

科学において人々がとる態度は、もちろん、この科学が置かれた時代の状況によってかなりのところ規定されます。少し前には、心理学の状況は、実際にある程度の慎重さが望ましいとするようなものであったかも知れません。私は、現在はそれほど躊躇する必要はないと考えています。実際に心理学の状況は間もなく大きく変わり、かなり急速な進歩がなされるかもしれません。

解 説

ここに訳出したヴォルフガング・ケーラーの「ヨーロッパから移住してきた科学者とかれらの新しい環境」は、1952年の春に行われたベンジャミン・フランクリン講演（ペンシルベニア大学）のひとつである。この連続講演の講演者は全部で5人おり、他の4人は、フランツ・ノイマン（政治学）、アンリ・ペール（文学）、エルヴィン・パノフスキー（美術史）、パウル・ティリッヒ（神学）である。かれらはみなアメリカへの亡命者である。

ヴォルフガング・ケーラーは、マックス・ヴェルトハイマー（1880～1943年）、クルト・コフカ（1886～1941年）と並ぶゲシュタルト心理学の創始者のひとりである。かれは、ドイツ人を両親として、1887年にエストニアのレヴァル（現代はタリン）で生まれたが、幼少のときに両親と共にドイツに戻り、ヴォルフエンビュッテルで育った。

彼は、1909年にベルリン大学で博士の学位を取得したのち、フランクフルト大学の心理学助手となった（1911年）。そして同大学で行われた彼とヴェルトハイマー、コフカとの共同研究が、ゲシュタルト心理学の基礎を据えることになった。

その後ケーラーは、1912年から1920年まで、プロイセン科学アカデミーの類人猿研究所長として、カナリア諸島のテネリフェで過ごした。この間の研究成果の一部が、『類人猿の知恵試験』（1917年）である。チンパンジーの問題解決や知覚に関するこの研究は、既存の学習理論に修正を迫るものであった。

1921年ケーラーはベルリン大学心理学研究所長に就任し、翌22年教授になった。彼は、ベルリン大学に来たアメリカの学生やアメリカへの彼自身の旅行によってアメリカでも知られるようになった。1925年から1926年にかけてハーバード大学とクラーク大学を訪問し、さらに

1929年の春に再びアメリカを訪れている。また1934年のウィリアム・ジェームズ記念講義をハーバード大学ですよう招待された。

ケーラーは、ナチズムの危険性を特に大学の同僚に向かって警告し、ナチ政権を公然と批判した数少ない心理学者のひとりであった。1935年ベルリン大学心理学研究所がナチスに接収されると、その年の夏ケーラーは辞職し、アメリカに移住した。渡米後かれはスワスモワ・カレッジの心理学教授になり（1935年）、1955年に退職するまでそこに留まった。1967年に逝去。ケーラーの著書の日本語訳としては下記のものがあ

る。

1. 佐久間鼎訳『ゲシュタルト心理学』内田老鶴圃、1930年。
2. 吉岡修一郎『ゲシュタルトの根本原理』内田老鶴圃、1935年。
4. 相良守次訳『心理学における力学説』岩波書店、1951年。
3. 宮孝一訳『類人猿の知恵試験』岩波書店、1962年。
5. 田中良久・上村保子訳『ゲシュタルト心理学入門』東京大学出版会、1971年。